

●その坊主！娘っこ！

K少年の通っていた下町の中学校は、地元でも指折りのワル学校だったらしい。本人達にはその自覚がなかったが...喧嘩が三度の飯より大好きなU番長がいたし、授業を抜け出してパチンコに出かけるような奴らもいた。

登校時の正門には決まって竹刀を持った先生が仁王立ち。朝礼には竹刀の数が増えている。その中のひとり、山形訛りのじっちゃん、芸大出のO先生が美術担当でKは好きだった。授業時間、先生の話聞いていない者に『その坊主！娘っこ！』と叫びながら、チョークを飛ばす。反抗する奴がいると、『俺は学校いつ辞めてもいい、校長よりたくさん給料もらっているんだ。画家で十分食ってかれる！』。。。。。でも褒めるのも他の先生たちより上手で好かれていた。

あれは中二の秋だった。『学校から見える景色を描きなさい。どこから描いてもいい...』校庭へ出て描くもの、教室で描くものと散らばった。陽の当たる暖かいところへ行くものが多い中、Kはどういうわけか、3階の北側廊下の窓を開け陣を取った。

描きはじめてしばらく、『まずった！....』と思った。学校の影でまわりの家々がまるで無彩色。どう描いたらいいんだ？ 悩みながらポイントを探していると、いつの間にかO先生が後ろに立っていた。『Kよ、目を凝らしてみろ、濃い影が一本見えないか』...困った、影は何本も見える。.....

沈黙、決断。この間教わった（紫の陰影）、太い筆を持った。勝負.....ポン！と肩を叩かれ、『そうだよ！そう！』...と褒めてくれた。嬉しかった。

後日、O先生の推薦で区的美術展にその絵が出品されることになった。驚きはそれだけではなかった。教壇でO先生、『今俺の絵が、上野の都美術館に飾ってある。興味のあるものは...』

生まれて初めての公募展へ一人で出かけた。恐れ多くも日本画の院展だった。平山画伯や東山画伯をはじめ日本画壇の第一人者達が出展する美術展で、絵を見に来る人たちで大混雑だった。お目当てはO先生の絵ただひとつ。.....

『おっ、あった。』それは、人里離れた静かな奥深い雪山の絵だった。金箔の上に岩絵の具を丹念に丹念に重ねていった力作。凄い先生に教わっているんだなと胸があつくなった。そして、Kは思った「煉瓦屋もいいけど画家になろうかな.....」



●国立競技場の秘密

小学校時代、自転車で鍛えた足のせいか短距離走は得意だった。しかし長距離は全く意気地がなかった。中学に入学後まもなく、50m走のタイム測定があり学年で3位の記録だった。秋に区の連合体育大会が千駄ヶ谷の国立競技場で開かれる事になり、1年代表で上位3名が選ばれた。東京オリンピックが開催されたあの競技場だ。アベベや円谷選手が走った栄光のトラック。本来手放して喜ぶべきところだが、Kはなぜか憂鬱だった。

トレパンでなく、ランニングと短パンで走らなくてはいけないからだ。そのころ Kは一足早く思春期に突入、ヒゲが伸びはじめ体毛が濃くなり始めていたのである。男子だけならいいが、女子に見られたくない。……大会が近づき一応ランニングと短パン、短距離用シューズも揃えた。しかし練習をしても気分が乗らない。むしろますます落ち込んでいった。

大会当日、ついにKは仮病を使って観覧席にまわった。自分自身の決断だったが空しくそして悔しかった。

……………時は過ぎ……………

紆余曲折はあったが K は大学卒業後に耐火材メーカーのP社に入社、工事課勤務を3年半ほど経験し、家業の築炉屋を継いだ。Kの家業はボイラーを主体とした築炉屋で発電所などの超大型のものを除けばありとあらゆるボイラーに携わって来たらしい。残念ながら蒸気機関車の火室のアーチ煉瓦はやらなかったようだが。

……………さて……………

19年後（連合体育大会から）、Kは一応ひととおり仕事を覚え、S社の旧盆工事で静岡県富士市の化学会社へ出張していた。後半戦にさしかかったところ、まさかの電話がかかって来た。T社のM課長からだ。『国立競技場のボイラー打替決まったからよろしく……』

『うっ 今度こそ絶対にあのトラックを走ってやる！』

翌日、宿の近くのスポーツ用品店で店主から詳しい説明を聞き、短距離用ナイキの Air Max を大金叩いて購入していた。

国立競技場の工事2日目の始業前、Kはボイラーマンの許可をいただいてあの栄光のトラックに立ち、ランニングに短パン姿、そして足には Air Max の出立ちでワインレッド色のトラックをキックし、Kは疾走したのであった。

汚名返上！ meiyo kaihuku！

●護衛艦『あきづき』161

「今度、豊洲のドックに入るから、良かったら遊びに来ないか.....」と海上自衛隊に行っている従兄弟から電話があった。

中学卒業後、Kの家に住み込み 昼間は築炉見習いで夕方から定時制の工業高校に通っていた。Kよりちょうど10歳年上でよくめんどろをみてくれた。

休日には、赤木圭一郎 や 祐次郎の日活映画や縁日に時々連れていってくれた。高校卒業と同時に、何故か海上自衛隊を志願し入隊した。本人の希望は潜水艦乗りだったが、肉体的な条件が厳しくわずかのところで護衛艦乗務となった。その護衛艦の名は「あきづき」、艦籍番号161で従兄弟は魚雷係になったが、海上演習で優秀な成績を収めすぐに昇級した。広島県呉の海軍学校を出て、1年あまりにもおよぶ遠洋航海でブラジルまで行き、その帰りに点検修理のため豊洲の石川島のドックに入るといふ。迷わず仲の良い友達に声をかけ3人で出かけた。

初めてのドック、はじめての軍艦でわくわくした。大砲や機関銃に圧倒された。「わあーすげー」 しかし、艦内は思ったより狭かった。階段はほとんど急で垂直梯子も多かった。船首から船尾まで長さ118mある甲板の上を行ったり来たり、艦内をそこら中探険した。

昼は中央にある食堂で隊員たちに混じって定食をご馳走になった。びっくりしたのはコックさん達が卵を両手で2個ずつもち、次から次へと割っては特大のボールに入れていく事だ。まるで手品を観ているようで面白かった。



時は流れ.....

耐火材メーカーのP社の工事監督になったKは、化学プラントやボイラー関係の仕事が多く、火力発電所や清掃工場の他、たまに船の仕事がやって来た。

NKKの浅野ドックでデンマークの貨物船、三菱横船の本牧ドックで香港の貨客船そして、住友重機械の浦賀ドックで護衛艦 ゆきかぜ 等ボイラーの修理を担当した。驚かれると思うが、修理の船は昨日ドックにいたと思ったら今日は岸壁に移動してたりする。

P社を退社して2年余り、名刺はとおけよと言ってくれた工事部長から電話。「船のボイラー修理があるけどやらないか.....」

「現場は浦賀で 船は護衛艦 あきづき...」 「えっ！あきづきですか！？」

躊躇わず「はい、お願いします」と仕事を請けた。あと2年の命だが、一部改造して司令官の乗る特務艦となり最後のお勤めだそうだ。心臓部の艦底に壁を隔てて、2つのボイラーがあり、魚雷で一つやられても航行できるようにしてあるという。そのボイラー2基だ。（三菱長船 製造）

蒸気タービンに加熱蒸気を送るスーパーヒーターの交換もあって、斜めに傾いた最小限のマンホールから前進匍匐で入り耐火材の解体も行った。あまりの狭さにチッパーが何度もつかえて参った。艦底によくぞこんな大きな水管ボイラーや付属配管、機器を収めたものだと感心し、設計した人たちはとてつもなく頭の良い集団なのだろうと思った。

スクリューに繋がるエンジンは蒸気タービンでボイラー室内に蒸気の実操作室が在り、車のアクセルに相当する大きな加減弁が表示板の所に構えていた。

＜逆転、微速、.....戦速.....最大戦速＞ 等と書かれていた。

海水から塩分を取り除く給水用の純水装置をはじめ、タービン室や補助のディーゼルエンジンもKは見学させてもらった。

しかし、工事は範囲も広がったので岸壁～甲板～艦内～艦底 間の解体屑や材料の搬出入は筆舌に尽くし難いほど困難を極めた。ウィンチやダブル滑車を駆馳して荷の揚げ下げしたが、さすがの父もこの時ばかりは根を上げた。

護衛艦「あきづき」とは、本当に不思議な縁であった。今は役目を終えて、おそらく廃艦になったであろう。戦地に赴く事なく、そして戦う事なくに船命を終えられて本当に良かった。ご苦労様でした。敬礼！

●津軽海峡夏景色

「そんなの鼻血だすぞ！」と担任の英語のM先生は半ば絶叫するように言った。希望の高校に入学後まもなくどこでも恒例の自己紹介があった。もともとは男子校だったので3対1と女子は少なかった。

めいめい趣味や特技、希望などを語った。ひとり180センチ位はある奴 I が前に立った。「僕は鉄道ファンで汽車が好きです.....」『うっ』これから K が言おうとしている事を先に言われてしまい焦った。話題を変えようと必死になったが、結局同じような事を復唱してしまった気がする。

終了後、どちらともなく近寄って話をし、すぐに仲良しになった。めざすは「本物の鉄ちゃん」で即二人で行動を開始した。「この夏休み、汽車を観に行こう！！」「それなら、やっぱ東北か北海道できれば軽便鉄道や炭礦鉄道も観たい！」「よし 北海道で決まりだな」

7泊8日すべて車中泊の恐るべき計画が完成し、学割をもらう都合担任のM先生にその予定表を見せにいった。

「こんなの無理だ!」「そんな計画 鼻血出すぞ!」谷岡ヤスジばりに先生は言った。どうやら先だって同じ位の期間、北海道に研修旅行があつて、かなりの強行軍だったらしく、実は先生自身が鼻血を出してしまったらしい。

「先生、大丈夫です。7泊中1泊、寝台を取りましたから……」

ようやく、先生を説得して許可をもらった。ところが肝心のI君、親に話したら絶対に駄目と言われ困った。そこでKは父に相談してみた。すると父は、I君の両親に電話をかけてくれ、「子供達が一生懸命に自分達で立てた計画ですから、信じて行かしてやりましょうヨ」

父の仕事でバイトして1週間後、上野発の夜行列車(十和田53号) 降りた時から 青森駅は往きの仲 北へ向かう ヒートの胸は みな無垢血で……
♪♭♯♪

●焼きとん『猿橋』

家の傍の尾竹橋通りに京成電鉄のガードがクロスしている鋭角な交差点がある。その名は花の木橋。どこにも川は見当たらないが、暗渠にされた藍染川が流れている。その一つの角に三角形をした焼きトン(モツ焼き)屋が数年前まであった。Kの家の近くの長屋に住むYおばさん(80歳くらい)がやっていた店だ。下町には数在れど、モツの新鮮度、秘伝のたれ、焼きの技術、雰囲気など、天下一品だとKは思っていた。

間口は2Kで、すぐに10ヶばかりの四角い腰掛け、座ると目の前がL字形のカウンターで、狭い方は3尺(0.5K)広い方でも1.5Kしかなかった。店はカウンターで仕切られ、その中央左に焼きトン用年代物の焼き台、右側に有田焼の大皿が そして厨房側に益子焼きと思われる壺が鎮座していた。

祖父の代から三代通った店だ。初代の頑固おやじは山梨の猿橋の出身だったと云う。日本三大奇矯のあの猿橋だ。祖父も山梨(上野原)出身だったので話が合い、常連となったらしい。でもみな店の名をさるはしと呼ばずえんきょと呼んでいた。Kも小さい頃から父に時々連れていってもらった。晩年はガラス張りのサッシになったが、その引き違い戸は開けるのにこつが云った。また店は戦後間もなくのバラック同然の木造で、裸電球がわずか3ヶだけぶら下がり、独特の雰囲気を醸し出していた。しかし、掃除好きなYおばさんはいつも店内を小綺麗にしていた。

常連は建材屋の親父W、注文家具屋の社長A、茅場町で塗装店をやってるHさん達や大学の先生、サラリーマン等と多彩な顔ぶれで、客同士の話題も多菜でそれも格好のつまみになっていた。意外な人と Jazz 談義になったり、有名人のブティックのデザインの話だったり、はたまた日本刀の鍛冶職人の秘話など毎回どんな話が聞けるか楽しみであった。

さて、Yお婆さんは午後3時頃から仕込んであった豚のモツをほとんど無口で黙々と焼き、レバ刺しを切ったりしながら、チューハイやホッピーを客に小さなグラスと受け皿で焼酎を量りながらに客に出していた。（しかし耳を澄ませば大概何かいつも独り言をつぶやいていた。父はその仕草からYお婆さんをグチコさんと言っていた。）

炭酸やホッピーの空き瓶はもちろん、焼きとんの串もは客の目の前に勘定までおかれたままで、各自の定量の目安と共に勘定のシンプルなシステムになっていた。

繁盛時間帯にはパートのやっちゃんがやってくる。団扇を煽ぎの焼き方専門だ。しかし、多忙を極めるお婆さんには到底かなわなかった。生焼けを出さず、焦げを出さず、炭を絶やさず、もつ焼きのプロ中のプロだ。そして焼き台の炉も良かった。外観は古いがお婆さんのご指名により当店で3回ほどプラスチック耐火材で打替を施していたからだ。これは内緒！



名勝 「猿橋」